

但馬におけるルリボシヤンマと オオルリボシヤンマの採集記録

上田尚志

ルリボシヤンマ *Aeshna juncea* Linnaeus とオオルリボシヤンマ *Aeshna nigroflava* Martin は、両種とも西日本では分布が限定されるが、近畿地方から中国山地にかけては、それほど少ない種ではないようである。しかし、但馬地方では最近までほとんど調査されておらず、氷ノ山と鉢伏高原などでわずかに記録されている程度であった。

筆者らは、両種が山地の湿地帯や池という比較的破壊されやすい環境に棲む大型のヤンマということもあり、数年前より分布データを集めてきた（但馬むしの会では、湿地に棲むハッチョウトンボ、源流域に棲むムカシトンボとともに、ルリボシヤンマ、オオルリボシヤンマを注目昆虫に決め、データを集めてきた）。しかし、今日まで組織的・計画的な調査はなされておらず、分布の実態を述べるにはあまりにも不十分であるが、若干の記録が集積されたので報告しておきたい。

《採集記録》

文献による記録を含め、現在入手している採集・目撃記録を以下に示す。また、記録は、年月日、採集個体（）内は目撃個体、採集地、採集者の順に表記することにする。

ルリボシヤンマ

- 1967-V-25, 幼虫, 氷ノ山古生沼, 日浦
- 1971-IX-24, 1♂, 氷ノ山, 永瀬
- 1980-IX-28, 1♂, 鉢伏山, 木下
- 1982-VIII-25, 1♀, 鉢伏山, 木下
- 1983-IX-26, 1♂1♀ (1♂, ♀数頭), 杉ヶ沢, 上田
- 1983-X-4, 1♂, 扇ノ山, 木下
- 1984-IX-22, 1♂, 大岡山, 木下
- 1984-IX-23, 2♂ (4♂1♀), 杉ヶ沢, 上田

- 1984-IX-30, (4♂), 杉ヶ沢, 上田
 1984-IX-30, 1♂(1♂), 大屋町加保坂, 上田
 1987-VIII-6, 1♂(3♂), 鉢北高原, 上田

オオルリボシヤンマ

- 1958-VIII-2, 幼虫, 氷ノ山, 西村
 1968-VIII-10, 1♂, 鉢伏高原, 永瀬
 1980-IX-14, 幼虫, 鉢伏山, 西村
 1981-VIII-6, 1♂, 鉢北高原, 上田
 1982-VIII-25, 2♂(1♂1♀), 豊岡市三開山, 木下・上田
 1982-VIII-25, (1♂), 豊岡市中ノ郷, 木下・上田
 1982-VIII-25, (3♂), 八鹿町浅間, 木下・上田
 1982-VIII-25, 1♂(3♂), 鉢北高原, 木下・上田
 1982-VIII-25, 2♂(3♂1♀), 杉ヶ沢, 木下・上田
 1982-VIII-29, (1♂), 日高町上ノ郷, 木下
 1982-VIII-29, (1♂), 日高町日置, 木下
 1982-VIII-29, 2♂, 八鹿町浅倉, 木下
 1982-IX-5, (1♂1♀), 豊岡市三開山, 上田
 1983-IX-10, 1♂, 扇ノ山, 谷角
 1983-IX-14, 2♀, 杉ヶ沢, 木下
 1983-IX-15, (1♂), 豊岡市三開山, 上田
 1983-IX-18, (2♂), 八鹿町浅間, 上田
 1984-IX-23, 1♂, 大岡山, 木下
 1987-IX-15, 1♂(1♂), 扇ノ山, 上田

*このほかに, 出石町森井(高橋, 1980)という確かな記録がある。

ルリボシヤンマは, これまでのところ低地では得られていない。最も低い大岡山の大岡寺跡で標高500mである。一方, オオルリボシヤンマは標高1500mの氷ノ山古生沼から標高20m程度の低地まで幅広い記録がある。両者の分布域は, 標高の高い部分では重なっている。しかし, 両者の好みは若干異なるようで, ルリボシヤンマは杉ヶ沢高原, 鉢北高原などの湿地もしくは小規模な水溜りで多数観察され,

オオルリボシヤンマは扇ノ山の菖蒲池、低山地の農業用水池など、比較的大きな池で観察されることが多い。

但馬の山地は現在、開発により姿を変えつつあり、特に湿地などは急速に失われる可能性がある。とくに、ルリボシヤンマの多産地は、いずれも開発の手がすぐそこまで伸びてきている。鉢伏高原のミツガシワのある池には、スキーロッジが迫っている。鉢北高原の湿地は、周囲がスキー場としてますます削られていつている。杉ヶ沢高原の湿地も、高原野菜の産地が迫り、干上がる寸前である。ミズバショウのある加保坂は、何とか保護されているものの、観光地化の波をかぶっている。

しかし、現時点では、但馬においてこの2種のトンボの分布は、かなり広く、かつ多産するのではないかと筆者は考えている。それは、分布する可能性のある水域を調査すると多くの場合発見できることによるのだが、さらに、両者は飛翔力のあるトンボであり、山間に点在する水域を広範に利用しているように思えるからである。ただ、同時に、私たちの調査した場所が彼らの生存に適した数少ない場所であり、だからこそ個体数も比較的多かった可能性も捨てきれない。いずれにせよ、調査地がまだ点にしかすぎず、実態は明らかでない。

最後に、この分布調査は木下賢司氏に負うところが大きい。あらためて謝意を表したい。

参考文献

- 西村 登(1981) オオルリボシヤンマ・ハネビロエゾトンボの採集記録, 兵庫陸水生物同好会会報 2.
- 関西トンボ談話会(1975) 近畿地方のトンボ, 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第7集.
- 高橋 匡(1980) 但馬地方昆虫目録(予報2), IRATSUME 4. 但馬むしの会.
- 浜田康・井上清(1985) 日本産トンボ大図鑑. 講談社.